

寛永通宝と六文銭

三途の川の渡し賃



出土遺跡 すさぎ 鋤先遺跡

寛永通宝は江戸時代のコインの1つで、明治初期まで使われていたので現代でもいろいろなところで見ることができます。

中世の日本では独自のコインが発行されておらず、中国銭を大量に輸入して使用していました。この方法は中国の貨幣政策に大きく影響を受けることになり、実際に江戸時代初期にあたる中国明朝では紙幣を中心とした貨幣制度に移っており、銅銭の生産量も減っていたので、日本独自のコインが必要でした。

江戸時代に入ってようやく強力な統一政権が樹立して、独自のコインを作ることが可能になりました。中世の日本では1文銭の銅銭のみが使われ、中国で使われていた大型銅銭や価値の異なる種類のコインはほとんど使われなかったため、高額の取引をする際には、大量の1文銭が必要でした。これを改めて新たに金・銀・銅の3種類の材料のコインが発行されました。さらにコインの大きさによって異なる価値のコインも作られ、交換方法も整備されたことから、経済が活性化しました。寛永通宝は品質もよく大量に発行されたため、国内に大量にあった古くなった中国の渡来銭や模造銭は数年間のうちに市場から姿を消していき、取引の混乱も収まりました。

江戸時代の墓からはよくコインが6枚副葬されています。これは六文銭と呼ばれるもので、三途の川の渡し賃とも、死後六道を巡る際に必要なお金ともいわれています。



3-5 あの世界も物入り？副葬銭

骨董商で、安価で大量に販売しているありふれたコインですが、現代のコインのようにどれも同じ字体ではありません。見慣れないと全部が同じに見えてしましますが、生産地や時代によって文字が違っており、見分けがつくようになると面白い分野です。

大きくは、裏面が無文か1文字入る1文銭と、裏面に波模様を持つ4文銭に分けられます。4文銭は「波銭」とも呼ばれ、1文銭4枚の価値がありました。また、銅ではなく真鍮製で、わずかながら鉄製もありました。

1文銭は材質から銅製と鉄製に分けられます。銅不足から元文4（1738）年から鉄銭が作られるようになりましたが、鉄銭は質が悪かったため、江戸時代後期になると額面通りでは取引されなくなり、幕府も銅銭の4分の1の価値での交換を公認しました。

1文銭は特徴的な文字から、「古寛永」と「新寛永」と呼ばれる2種類に大別されます。「古寛永」とは万治2（1659）年までに作られたもので、「寶」字の最終3画が「ス」を形成するところに特徴があります。これに対して、寛文8（1668）年以降に作られた「新寛永」は「寶」字の最終2画が「ハ」の字です。

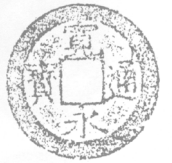
次にはっきり判別できるのは裏面に文字が入るもので、最も多いのが「文」の字が入る「文銭」^{ぶんせん}です。寛文8（1668）年に鑄造された新寛永で、豊臣秀吉が建てた京都方広寺の大仏を鑄潰して鑄造されたもので「大仏銭」とも呼ばれます。このほか「長」「元」「佐」などがあり、それぞれ長州・大阪・佐渡で作られたものです。

このほかにもコイン収集界では字体から1,000種類以上に細かく分類していますが、発掘された銭鑄型との対照で産地が確認できたものはほとんどないため、現段階では考古学的にはほとんど用いられていません。

六文銭

六文銭は、葬送儀礼の一つで、納棺の時に納める副葬品です。

銭を副葬する行為は古代から見られますが、6枚セットになるのは室町時代後半以降です。6枚ではなく5枚しかないことや7・8枚あることもあります。5枚しかないのは、埋葬した人が手間賃として1枚抜いたといわれています。



4文銭



鉄銭



古寛永



新寛

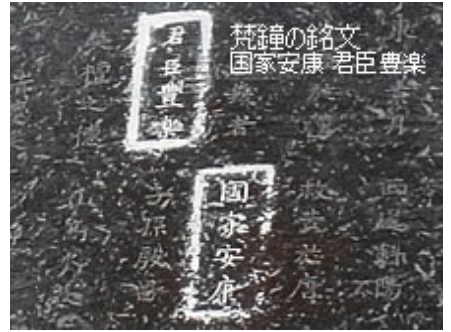


参考文献：福岡県教育委員会 1995『鋤先遺跡』椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第5集

写真：本館撮影

3-5 あの世も物入り？副葬銭

方広寺は豊臣秀吉公が創建した広大な寺域(東西 210m、南北 260m)を持つ寺院でした。今の方広寺や豊国神社、京都国立博物館他の敷地が含まれていました。寺は木造盧舎那仏坐像を本尊とし天正 14 年(1586)創建され、大仏殿は桁行 89.3m、梁行 57m、高さ 50m で、大仏は漆、金箔をで彩色された 19m の高さで文禄 4 年(1595)完成し、秀吉は父母の法会を大規模に行いました。翌慶長元年(1596)伏見大地震で大仏倒壊 大仏殿は残りましたが慶長 7 年炎上しました。



その後慶長 15 年(1610)徳川家の勧めで秀頼公は豊太閤の追悼供養に 19m の金銅大仏を再興 開眼供養前 慶長 19 年(1614) に鑄造の大梵鐘銘文中の「国家安康 君臣豊楽」の文字を南禅寺金地院崇伝らにより故意に解釈され、鐘銘事件として大阪冬の陣へと発展し、元和元年(1615)夏の陣で豊臣家は滅亡しました。その後方広寺は妙法院の管理下となり大仏は寛文 2 年(1622)地震で倒壊後 徳川家により寛永通宝に改鑄され特に貨幣は寛文の文の文字が刻まれ大仏銭・文銭と呼ばれたそうです。代替に寛文 4 年(1624)木造大仏が造られ寛政 10 年(1798)雷火で大仏殿共焼失、その後 1801 年 5 代目の木造仏が作られ、天保 14 年(1833) 半身の大仏が祀られ昭和 48 年(1973) 火災で焼失。今は秀頼建立 1/10 の大仏が本堂に祀られ、金銅仏破片等が展示室にあり、近くの公園に大仏殿跡があります。



方広寺 本堂と大黒天堂



3-5 あの世も物入り？副葬銭

